

20151013\_農業情報総合研究所／森林環境保全研究会\_議事録

日時：2015年10月13日（火）19:00－21:00

場所：東京・大手町 「3×3 Labo」

テーマ：「地域資源活用で中山間イノベーション！ ～農業と林業の融合による持続性～」

発表者：葛谷栄一さん（農的社会デザイン研究所代表）

参加者：17人（発表者を含まない）

（NPO 法人理事長、会社経営、農家、会社員、公務員、行政書士、司法書士など）

目次：

1. 農業の位置付け
2. 政策提言「地域資源活用で中山間農業のイノベーションを！」の概要
3. 農業と林業の融合の展開
4. 農業・林業と地域
5. まとめ

発表：

1. 農業の位置付け

産業としての農業のベースには、土地、環境、コミュニティが存在しています。土地、環境、コミュニティは社会的共通資本とすることができます。これからは社会的共通資本を大事にした農業が必要になります。これにより、産業としての農業としても存続できます。また、市場原理とのバランスを回復させることにもなります。

またこれからは日本農業が持つ特質を活かしていくことが必要です。農業は、自然、環境に依存しており、いろいろな形態があるということです。しかし、生産性でしか語られないですし、評価されていません。国、地域により違って、当然なの입니다。地域性、多様性がポイントになります。米国や豪州は単一の環境にて大規模農業を営んでおり、経済効率は良いです。しかし、日本はそうではありません。地域性、多様性があります。そこに、希望と展望があります。また、都市と農村の距離は近く、交流の条件に恵まれています。

そして三つ目の今後の農業の方向性です。農業の持つ基本要素として、安定供給、安全、価格、品質・安心、コミュニケーションが挙げられます。安定供給、安全が基本となりますので、国の政策支援の対象となります。価格については、日本の農業は競争力が乏しくなっています。品質・安心は消費者が求めています。健康に良いものを求めることがこれに該当し、ニーズを持つ消費者もたくさんいます。これに対して、日本の農業技術の高さが担保しています。コミュニケーションは生産者と消費者の交流がベースになります。品質・安心は国境を越えてくることもできます。しかし、コミュニケーションは人と人との関係です。国境を越えるのは難しいです。品質・安心、そしてコミュニケーションに力をいれていくことがポイントとなります。

日本農業は専業農家と兼業農家の区分で語られてきました。今後は、土地利用型と高度集約型の農家、プロとアマチュアの農家に分けて考えるべきです。プロ農家グループとアマチュア農家グループが地域で一緒になって農業を支えていくこととなりますが、特に土地利用型農業については少数のプロ農家が担うこととなりますが、草刈りや水路の管理等はアマチュア農家が分担していくという構図となります。地域性を支えるのはプロ農家だけでは難しいからです。

これが、地域農業です。国際的な競争において、地域性、多様性で対抗していく、グローバル化にローカル化で対抗していくということです。これは全国一律の農業ではなく、県単位よりも小さい単位での取組みとなります。

## 2. 政策提言「地域資源活用で中山間農業のイノベーションを！」の概要

提言の意図するところは、中山間地農業は変わらないと生き残りは難しいということです(なので、「イノベーション」という言葉を使っています)。中山間地域の振興と多業型の経済が必要です。農業の専業だけでは経営は厳しいものになります。いろいろな形態で現金収入を得ながら農業を行う、あるいは、農業と林業を兼ねていくべきです。また、中山間地は国民の共有財産にふさわしい農業を展開していくことによって、国民・消費者の理解を得られるかどうかのポイントです。農業者・林業者だけが主張しては足りません。中山間地は地域資源の宝庫です。地域資源という目で見つめ直すべきです。共有財産であるためには安定供給だけでなく、環境にやさしく持続的であることが要件となります。しかし、過疎化・高齢化が進んでいます。都市との交流、そして人材確保、さらには担い手のレベル・アップが必要となります。また農業だけの経営は難しく、地域振興と一体にならないといけません。農業だけでは人を呼び込みにくいです。補助金欲しさに政策支援を要望するのではなく、自立を目指しながら、自分たちで政策提言するとともに、実行していく必要があります(ただし、国際競争力に欠ける部分への補助は必要です)。

農業にはお米の過剰(生産調整の動向)という課題があります。とはいえ、食料安全保障を考えると、水田を飼料用米等に水田放牧も含めて畜産的に活用していくことが大切です。いままでは日本では農業と畜産が分かれていましたが、耕畜連携、特に遊休農地等を活用した放牧の大々的な展開が必要です。米国・欧州では家畜福祉の概念が浸透し、急速に高まっています。たとえば、鶏のケージ飼いは禁止です。こうした家畜福祉の面からも放牧が重視されなければなりません。それから地域別に水田を捉えていくべきです。水田、稲作は全国共通という固定観念を崩すべきです。傾斜地、緩傾斜地、それぞれの地域に合ったやり方があります。さらに大規模化のベクトルとは別に、地域性を活かして、特産品化と高付加価値化を目指すべきです。中山間地こそ地域性、多様性があります。また、森・里・海の連関も必要です。農業だけの環境保全では足りません。たとえば、農業用水は海に流れます。大きいエリアでの循環、農業者と水産業者、林業者の連携が重要になってきます。また、これは景観作りともなり、都市農村交流のためにもなります。

私は日本農業辺境論を提唱しています。一般に条件の悪いと言われるところこそ、地域性・多様性、都市農村交流のポテンシャルを持ちます。平坦地ほど、輸入農産物との競合関係が強くなり、生産性、コストが勝負の分かれ目となります。米国・豪州などの新大陸型の農業の追随をしていては、こちらこそ政策支援が必要になってくるでしょう。また、食糧安全保障を重視し、それぞれの国の食糧主権を守っていく必要があります。そうなれば中山間地での農業が世界のモデルになるかもしれません。そのためには、中山間地に人を残し、担い手を育てていく必要があります。生産者と消費者の関係性が重要になります。また、地域振興と一体として行うべきです。地域内の農商工連携や、ヒト、モノ、カネを回す地域自給圏の発想が必要になります。合わせて、多面的「公益」機能についてです。農業、農村は国民の共有財産であり、多面的な公益性を発揮しています。政策支援と自立のバランスが必要です。中山間地も含めて農業が多面的機能を発揮し景観を維持しており、農家はマンションの管理人的な存在ともいえます。こうした公益性発揮のための農作業に対してお金が出せないかを検討すべきです。そうでないと、中山間地の景観、循環が壊れる結果をなるともなりません。

### 3. 農業と林業の融合の展開

中山間地については林業のあり方も含めた取組みが必要です。取組みとしては以下のとおりです。①林間放牧。森林も担い手がいなくなり、下草が伸び放題になっています。これを牛に食べさせるというものです。林業の労力軽減ができます。農業と林業の一体化ともなります。中国地方や、宮崎県、北海道などで導入されています。これにより、木材の品質が良くなるかとされています（検証は未だ不十分です）。②林産物。中山間地で注目されています。たとえば、マツタケです。長野県の伊那谷が一番の生産地域になっています。これは他所の中山間地が荒れているからです。山野草の薬用化にも注目が集まっています。合わせて、③バイオマスです。なお、中山間地では鳥獣害の被害が深刻です。これは山に実が無くなっているからです。落葉樹がある程度必要ということであり、針葉樹中心の植林からの転換をすべきです。

### 4. 農業・林業と地域

林業が供給するものには二通りあります。一つは産業的なものです。建材など産業材としての供給です。もう一つは生活財、環境財の供給です。たとえば、バイオマスです。ただし、後者だけでは、林業は成り立ちません。そこでポイントは、住宅の建材としていかに使うかということになります。輸入材よりも国産材のほうが安くなってきています。しかし、切り出す労働力の確保などがないと難しい状況です。なお、景観作りにも林業は役立ちます。地元の職人が作った地物の家は景観の柱になります。たとえば、山形県の金山町です。ここの街並みを見にたくさんの観光客が来ています。

### 5. まとめ

今後、生産と暮らしを一体化しての取組み、地域循環をつくっていくことが必要です。たとえば、家庭で、木質ペレットのストーブを使用するなどはその一例です。農業とも噛み合わせて、点から線、線から面へと広げるべきです。これは地域振興にもつながってきます。

以上